

## 「セイロンティ」にいたる 欧州諸宗主国の植民地主義の変遷とその残滓

宮寄 晃臣

### はじめに

調査7日目3月6日、キャンディからヌワラエリヤのホテル Black Pool Hotel に到着したのは21時をとうに過ぎていた。それまでの葛折りの続く山中は漆黒の闇であった。宿泊先で迎えた8日目の朝は中央山地の澄み切った空気に満ちあふれていた。前夜の車中で風景は何も見えなかっただけに、この朝眼前に広がった高地の景色は別の国に来たかのような錯覚すらもたらした。

前夜の強行運行のせいか、バスの排気機構にトラブルが生じ、三菱自動車の古びたマイクロバス、ローザに乗り換え、好天のなか、紅茶園 Pidurutalagala Tea Factory に向かった。「セイロンティ」の一大産地ヌワラエリヤの紅茶工場とその直売所を見学した。今から思えば、農園内の住居を観ておきたかった。本稿はその折見学できなかった農園内から見えて来たはずの歴史的刻印について考えようとしているからである。後の祭りであるが、そのように悔やむのには時間はかからなかった。この紅茶園からしばらく下ると、途中瀑布等風光明媚な箇所を通過したのち、広大なヴィクトリア・パークに到着した。ヴィクトリア女王の名のついた公園であることから分かるように、植民地時代のイギリスの「遺産」が否応なしに視界に入ってくる。グランド・ホテル、これはイギリス植民地時代の総督宅で、その前にはヌワラエリヤ・ゴルフクラブが緑をたたえ、おまけに競馬場までもが。「リトル・イングランド」と称される所以であろう。イギリス帝国主義者の遺産を目の当たりにし、先ほどいたヌワラエリヤの紅茶農園を振り返ってみると、「セイロンティ」自体がイギリス植民地時代の負の遺産であることに気付いたのである。

というのも、ヌワラエリヤの紅茶農園はいまや経営は現地化されているとはいえ、植民地時代のプランテーション農園をいくつかの面で引き継いでいるからである。まずは植民地時代に南インドから、島内では徒歩で中央山地まで連れてこられたタミル人の子孫の多くが農園の労働に携わっている。南インドから連れてこられたタミル人の多くは農園内にある長屋に居住し、このタミル人の子孫は先祖代々、同じ区画に住み、今でも植民地時代と変らぬ生活をおくっているという。第2に紅茶は輸出比率にして95%の輸出用換金作物で、第3にその販路の93%がオークション販売であり、オークションから消費者に販売されるまで、その多くの部分がリ

プトンブランドのユニリーバーとか、トワイニングなどの英系グローバル企業によって担われているのである。

スリランカの宗主国はイギリスに限られるものではなかった。というのもスリランカが植民地となったのはイギリスが初めてではなかったからである。スリランカも宗主国がポルトガル→オランダ→イギリスと変遷しているのである。「大航海時代」の幕開け時のイベリア半島両国による植民地分割から最終的にはパクス・ブリタニカの確立にいたる欧州植民地主義のプロセス中に、スリランカも植民地として欧州国家による収奪の一つの対象にされてきたのである。したがって「セイロンティ」も欧州宗主国による植民地支配の一環であり、そのことをひもとくためにイギリスの覇権が定まるまでの欧州列強の植民地時代にさかのぼっていきたい。

## 1. スリランカと西アフリカ黄金海岸との類似性

前後するが、調査3日目の3月2日夕刻、ジャフナフォートを実踏した。パルシックによって用意された「旅のしおり(スリランカ)」には次のように紹介されている。

「ジャフナ半島南側のラグーンに面する要塞で、スリランカ国内に残る要塞のうち2番目に大きい。ジャフナ王国がポルトガルに合併された1619年、ポルトガルによって建設され、17世紀後半から18世紀にかけてのオランダ統治時代に拡張された。当時はヨーロッパとの交易の拠点としてジャフナが発展した時代である。

1795年、イギリスの手に移り、1948年まではスリランカ全土を統合していたイギリスによって使用されていた。その後、スリランカ政府軍の管理下に置かれる。1986年から95年には、LTTEが軍事拠点として利用していた」。

ポルトガル人がスリランカを訪れたのは1505年、そして「侵略の意図をより明確に示したのは1517年のことであった。彼らはインド・マラバル地方のコチから17隻、ゴアから10隻の軍艦とともに700人から1000人の兵力をコロンボに送り、要塞建設の許可を要求した。・・・要塞を建設すると、ポルトガル人は今度は王が扱うすべてのシナモンを一定の価格で売り渡すよう要求した」(杉本[2013]、47頁)。その後ポルトガルは「徐々に沿海地方を領有・支配するようになった」(中村尚司「スリランカ社会の諸問題」3頁、<sup>ii)</sup>)。「その頃、南部のシンハラ王朝は分裂し、三つの小王国に分かれ・・・北部にはジャフナを王都とするタミル人のジャフナ王国が独立していた」(同)。叙上のように要塞を築いたのがジャフナ王国がポルトガルに併合された1619年であることから、要塞を築いてまで防衛しなければならなかった対象敵はジャフナ王国ではありえない。シナモン交易独占の横取りを図るオランダとの攻防に備えてのことであった。オランダによるスリランカ強奪は1602年から開始され、ポルトガルとの攻防の結末が

このジャフナ要塞で、ポルトガルの敗北、撤退となったのである<sup>iii</sup>。

オランダはポルトガルをスリランカから放逐したが、スリランカに関する植民地主権を横取りすることが目的で、スリランカからすれば、宗主国がオランダに変わっただけの話で、植民地支配は継続されたのである<sup>iv</sup>。

オランダ東インド会社による商業利潤獲得の対象はシナモンだけでなく、コーヒーにも向けられた。コーヒーの原産地はエチオピアで、イスラム圏で飲料として広まり、イエメンの「モカのコーヒーがアムステルダムに定期的に輸入されるようになったのは 1663 年で」（臼井 [1992]、51 頁）あるが、オランダ東インド会社は「すでに 1642 年、3 万 2000 キロのコーヒーをインドのカルカッタに搬入している」（同上）。というのも「メッカやメディナを介して、コーヒーの知識と習慣はインドやインドネシアのイスラム圏に広がっていた」（同上）からである。そして「アムステルダムやロッテルダムの商人はコーヒーを買って売るよりも、作って売る方が利益の大きいことに気がつき、オランダ東インド会社は自分の植民地にコーヒー・プランテーションを築くのである」（臼井 [1992]、52 頁）。植民地にコーヒー・プランテーションを築くのは可能な限り安く作ることが目的である。臼井 [1992] によれば、その「最初の試みはすでに 1658 年、セイロンで行われた」（同上）たという<sup>v</sup>。

しかし、業突張りはさらなる業突張りに利権を脅かされる。オランダがポルトガルにしたように。「イギリスは、植民地との貿易をイギリス船舶に限定する航海条例（1651 年、1660 年）を發布し、オランダの中継貿易に打撃を与え、17 世紀後半に 3 次にわたる英蘭戦争でオランダを破」（SGCIME [2017]、140 頁）り、さらに第 4 次英蘭戦争の一環としてイギリスはスリランカにおいても侵攻を進めた。イギリス軍は 1795 年にトリコマリーを占領し、続いてジャフナも占領し、1796 年初頭にはネゴンボを、さらにそこからコロンボへ進軍した。「2 月 16 日、コロンボは英国軍に占拠された。続いてガーツラも占拠された。138 年に及ぶオランダのランカー島海岸地域の領有が終わった」（『エリザが読んだ セイロンの歴史』<http://www.ne.jp/asahi/khasya-report/khasya/history-lanka/16-rule-of-netherlands.html>）。

そしてイギリスの植民地支配は 1948 年まで続くのである。

こうしたポルトガル→オランダ→イギリスという植民地支配変遷の類いは「大航海時代」からの帰趨がパクス・ブリタニカの形成にかけてみられる事例で、スリランカに先行する類似の一例としてアフリカ西海岸のゴールデン・コーストの帰趨についてみておきたい。

11 世紀からの十字軍遠征はイスラム世界を介して流入するアジア香辛料をヨーロッパにもたらした。しかし陸路を通してのアジアとの交易ではイスラム世界やジェノバ商人が壁となり、その回避には大航路の開拓が必要となり、イベリア半島の 2 国が大西洋に乗り出した。1492 年のコロンブスによるアメリカ航路の発見、1498 年のバスコ・ダ・ガマによるインド航路の開拓

がなされた。我々の高校時代はこれらを「地理上の発見」として習ったが、発見者がその地の支配権者になるという、スペインとポルトガルによる世界分割という丸出しの植民地主義がこの言葉によって代弁されている。ポルトガルは 1418 年にエンリケ航海王子がアフリカ西海岸の調査を開始し、これが嚆矢となり、1471 年にはアフリカのギニア湾エルミナにてアシャンティ族との間で金細工とブランディ、衣類、さらには銃との交易を開始する。ここでポルトガルは莫大な金を交易で獲得し、黄金海岸と名付けられる所以となる。他方アシャンティ族は交易で得た銃で勢力を拡大し、周辺の部族を制圧し、「奴隷狩り」を行う。1481 年ポルトガルはレンガ等の築城材料をポルトガルから積み込み、翌 1482 年にサン・ジョルジュ・ダ・ミナ砦を築く。その 12 年後にスペインとポルトガルの間にトルデシリャス条約が締結され、現セネガル沖の西経 46 度 37 分以東がポルトガルに、以西がスペインに属することが教皇認可の下で取り決められた<sup>vi</sup>。トルデシリャス条約締結前に築かれた要塞であることから、その築城目的はアシャンティとの金交易を他の欧州勢力の海賊行為から防衛することにあった。1581 年にスペインから独立しオランダは実際に 1637 年にサン・ジョルジュ・ダ・ミナ砦の背後の密林に進軍路を拓き、この「砦を奪い、エルミナ砦を築いた」(布留川 [2019]、45 頁)。これを機に黄金海岸の支配権はオランダに帰することになる。

黄金海岸で交易されたのは金だけではなかった。アフリカ人奴隷が交易の対象にされたのである。ポルトガル領ブラジルではサルヴァドール・ダ・パイア(パイア州サルヴァドール市)に 1549 年からポルトガル総督府が設置され、「1558 年、アフリカから連れてこられた黒人奴隷の売買が、この地で始まった。ここは南米大陸で初の奴隷市場が設けられた地なのだという」(清田 [2010]、20 頁)。当初は砂糖精製に奴隷が用いられた。

Eltis [2010] では次のように記されている。「砂糖生産は奴隷となり大西洋横断を生き延びたアフリカ人の生活を支配した。屈強で健康な成人男女を、サトウキビを植えて収穫する畑作業のグループに組分けし仕事は行われた。また別の奴隷グループが補助的役割を担う。サトウキビ栽培は精力を使い果たす仕事なので、生産を維持するには規則的に捕虜を供給し続ける必要があった。同じく骨の折れるのは精製、つまりサトウキビから糖蜜、ラム酒、その他市場に出す商品を『製造』する作業である。サトウキビ精製には技術と共に熟練したアフリカ人労働力確保に向けた投資が必要であった」(16 頁)。同書が推計する「アフリカから連れ出された船籍国別奴隷数 (1501-1867)」では合計 12,522,570 人のうち、「ポルトガル/ブラジル」船籍によるのは 5,849,300 人と 46.7% を占め、砂糖精製だけでなく、煙草、コーヒーのプランテーション栽培にも多くのアフリカ人奴隷が用いられるようになった。サン・ジョルジュ・ダ・ミナ砦もアフリカ人捕虜を収容し、奴隷船への「積み出し」に用いられるようになる。オランダの植民地支配の下でも奴隷貿易は継承され、1664 年にイギリスがこの黄金海岸の支配権を握り、強め

ていった時代も奴隷貿易は続き、その中心となったのがケープ・コースト城である。同じく Eltis [2010] では次のように記されている。

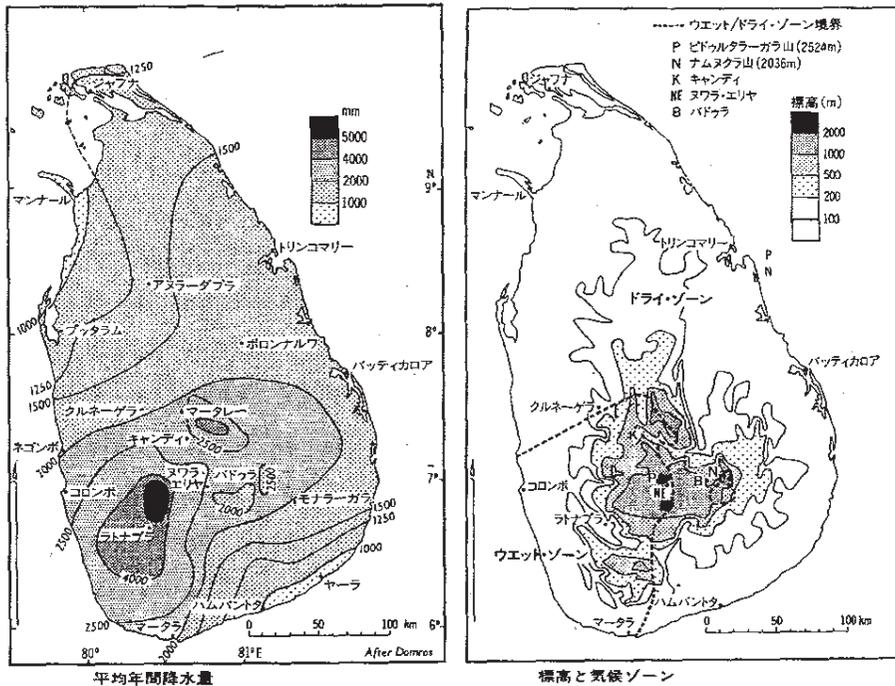
「スウェーデンにより 1653 年に建設されたケープ・コースト城は、1663 年、デンマーク人に奪われ、その 1 年後、英国人により征服された。ここは英国王立アフリカ会社の本拠地になり、何十年にもわたり西アフリカにおけるイギリスの奴隷貿易独占の場所として占拠された。その後英国人その他の、特にロンドンを拠点とする独立貿易商の交易場となった。ケープ・コースト城から連れ出された奴隷は、最初他の砦から連れてこられて海岸沿いで交易され、ほとんどはバルパドスとジャマイカに行った。ケープ・コースト城での奴隷貿易は、イギリスが奴隷貿易を廃止した後、1808 年に終了した」(Eltis [2010]、123 頁)<sup>vii</sup>。

スリランカと黄金海岸とで宗主国の変遷が共通している。しかし、交易対象はシナモンを中心とする香辛料と金、アフリカ人奴隷と同質と異質のものが混ざっている。同質とはシナモンが当時金より高価とされていた点である。商品経済的な「交易」を通して富がアジア・アフリカから移転した点では共通している。また、黄金海岸からブラジルに運ばれたアフリカ人奴隷はサトウキビのプランテーションで酷使された。ブラジルとスリランカではプランテーションが宗主国によって経営された点では共通している。しかも 2-(2)で詳しく見るように、両者はオランダ、イギリス統治下でコーヒーのプランテーション栽培がなされた点で共通しているのである。また 2-(3)で詳しく見るように、イギリス統治下で実現された紅茶のプランテーション栽培でその労働力がインド南部から連れてこられたタミル人によって担われた点でも奴隷貿易と共通する要素が見いだされる。イギリスのスリランカ統治は 1796 年からで、紅茶の栽培開始は 1867 年で、イギリスでは 1807 年に奴隷貿易を違法と定め、翌年から発効しているので、インド南部から連れてこられたタミル人は奴隷であってはならない。しかし、植民地時代に宗主国の経済的強制がはたらかなければ、100 万人を超える大規模な人口移動は実現されなかったであろう。また独立後にもこの負の遺産は意図的に温存され、エステートタミル人の種々の困難が未解決のまま残されている。こうしたことを踏まえ、次に「セイロンティ」に刻まれ、現在にもいたる歴史的刻印を考えていきたい。

## 2. 「セイロンティ」に刻まれた歴史的刻印

スリランカにおいてコーヒー、紅茶のプランテーション栽培が実現されたのは中央山地である。そこで、まずスリランカの自然地理的特徴を整理しておきたい。

2-(1) スリランカの自然地理的特徴



図一 平均年間降水量、標高と気候ゾーン

出所：ジョンソン, B. L. C. 1987. 『南アジアの国土と経済：第4巻スリランカ』（山中・松本・佐藤・押川訳）、二宮書店。  
 なお引用は国際農林業協力協会 [2004] 3 頁から

図-1 に示されているように、スリランカの自然地理の最たる特徴はウエット・ゾーンとドライ・ゾーンとに区別される点にあり、「大まかに言って年間降水量 2000 mm 以上の地域がウエット・ゾーン、それ以下の地域がドライ・ゾーンであること、またウエット・ゾーンは国の南西部に位置し、国土の 3 分の 1 ないし 4 分の 1 の面積を占めるに過ぎないこと、さらにその地域が標高 2000m 以上の山岳部を抱える中部高地地帯のほとんどすべてを包含している」（国際農林業協力協会 [2004]、3 頁）。この明瞭な地理的区分は農産物の植生の違いとなっており、「茶とゴムの栽培はウエット・ゾーン中央高地の南西側斜面から低地にかけての狭い地域にほとんどが限定され・・・ココナツも主としてウエット・ゾーンの作物であり、シナモン、コショウ、カルダモン、シトロネラのような香辛料やカカオ、コーヒー等・・・もほとんど総てウエット・ゾーンの特産物である」（国際農林業協力協会 [2004]、33 頁）。

## 2-(2) スリランカにおけるコーヒーのプランテーション栽培

コーヒーの原産地はエチオピア高地で、飲む習慣は14世紀にイスラム社会にひろまり、1652年にはロンドンにコーヒーハウスが開店するほど、17世紀にはヨーロッパにも拡大する。この拡大はコーヒー豆の焙煎という技術とコーヒー栽培の広がりによってもたらされた。後者については「アラビア半島イエメンに端を発したコーヒー栽培は、オランダ東インド会社により世界に広がり」（清田 [2010]、24頁）、「スリランカの農業省が発効しているテキストに、スリランカコーヒーの歴史の記述がある。ほんの数行の記述だ。—1503年、アラビア人によりセイロンにコーヒーが伝わった。1658年、当時セイロンを植民化したオランダにより、コーヒー栽培が大規模に拡大された」（清田 [2010]、53頁）、と。1658年は東インド会社がポルトガル領を継承した年であるが、その年にスリランカにコーヒーの苗木を持ち込んで栽培を開始した（白井 [1992]、52頁）。しかし、どの種の苗木をどこから持ってきて栽培されたのか、杳として知れない。さておき、清田 [2010] では *All ABOUT COFFEE* からスリランカのコーヒー輸出量が紹介されている。「1741年に年間約17万kg、1836年約560万kg、1870年には5360万kg」であると（52頁）。スリランカで「さび病」が大発生したのが1868年なので、1870年のコーヒー輸出量が5360万kgとはオールド・ビーンズでの輸出なのか、一端他の地域から輸入したコーヒー豆を再輸出したものなのか、それとも1870年では「さび病」の被害が収穫量としてさほど出るほどでもなかったのか、不明さも残るが、1836年の約560万kgにしても相当の生産量を誇っていたことには違いない<sup>viii</sup>。

## 2-(3) スリランカにおける紅茶のプランテーション栽培

ところが1868年の「さび病」の大発生によってスリランカコーヒー農園は壊滅的被害を蒙ったとされている。すでにイギリスの統治下であり、イギリスはプランテーションの栽培作物を紅茶に転換する。

その「パイオニア」となったのが、ジェームス・テイラーである。スコットランド出身で16歳でスリランカのコーヒー園で働き、インドで茶栽培を学び、「1867年、自宅の前庭に茶の苗木を植え、栽培に成功」（RSVP No.14『紅茶の楽園、スリランカへ』、26頁）し、ルーラコンデラ農園を築いた<sup>ix</sup>。

1890年にはトーマス・リプトンがウバ州をはじめ5つの農園を買い取り<sup>x</sup>、DIRECT FROM THE TEA GARDENS TO THE TEA POTを「リプトン紅茶」のスローガンに低価格帯で紅茶を売り出し、ボリュームのある紅茶需要を喚起したこともあって、スリランカにおけるプランテーションは紅茶が主役に様変わりすることとなった。

しかし、紅茶栽培の経験のないスリランカで紅茶農園が一気に広がりをみせるには熟練した

労働力が大量に必要となる。茶の栽培、茶摘み、茶の発酵、乾燥また揉捻機の操作、これらの作業には経験が必要であり、紅茶のプランテーション経営の先行植民地インドの南部から連れてこられた大勢のタミル人がプランテーションでの労働にあてがわれたのである。国際農林業協力協会 [2004] によれば、「最初のセンサスが実施された 1871 年にはわずか 240 万人に過ぎなかったスリランカの人口は、60 年後の 1931 年には 530 万人と 2.2 倍に増加したが、その増加の 40% 近くが南インドからの人口移動によるものであった（国際農林業協力協会 [2004] 5 頁、<sup>vi)</sup>）。この推計だと約 120 万ものタミル人が南インドから連れてこられたことになる。

叙上のように、イギリスでは 1807 年に奴隷貿易禁止法が制定され、翌年に施行され、さらに貿易だけでなく、制度自体が問題視され、1833 年に奴隷制度廃止法が制定された。そして「1845 年末には奴隷制度がセイロンから消え去った」

(<http://www.ne.jp/asahi/khasya/report/khasya/history-lanka/23-britain-as-colonial-ruler.html>)、とエリザの読んだ『セイロンの歴史』でも記されている。したがって、奴隷制度が国際的にも、スリランカでも廃止された後に南インドから連れてこられたタミル人は当然「奴隷」であってはならない。「奴隷」として「連れてこられた」のでなければ、どのような状態で連れてこられたのであろうか。奴隷制廃止後、「英領西インドのプランテーション労働力の主力はインドからの年季契約労働者になった」（布留川 [2019]、216 頁、<sup>vii)</sup>）のであり、この英領植民地インドの事例から類推すると、スリランカに連れてこられた南インドのタミル人もおそらく奴隷制廃止という時勢により、「年季契約労働者」として連れてこられたと考えられよう。しかし、100 万を超える人々が、故郷を捨てて自発的に海を越えて、同じイギリスの植民地、しかも中央部の孤立した高地に移住するとは考えられない。アウト・オブ・カーストを含め、南インドのどのような「カースト」のタミル人が、どのように集められて、スリランカの中央山地にまで移住させられたのか、判明できなかったが、この移住には宗主国の経済外的強制力、インド国内の「カースト」制度がはたらかなければ実現できるものでないことぐらいは想像できる。

また、この年季奉公人制の実態について、布留川は「一言でいえば『偽装された奴隷制』にほかならなかった」（布留川 [2019]、201 頁）と記している。事実イギリスにおいて、「1838 年 5 月 12 日、・・・年季奉公人制は野外労働者を含めて 1838 年 8 月 1 日をもって終了する、という決議（が）下院に提出」され、「議論が素早く行われ、採択された。ただし、最終的に年季奉公人制を廃止したのは各植民地議会の決議であつ（て）・・・モントセラト議会を皮切りに各植民地で決議が続いた。そして、1838 年 8 月 1 日をもって奉公人制は廃止されたのである」（布留川 [2019]、203 頁）。スリランカのプランテーションで植え付け作物がコーヒーから紅茶に変更される契機となった「さび病」が大発生したのが 1868 年であるから、その頃には年季奉公人制はすでに世界的に廃止されている。同じイギリスの植民地のスリランカで年季奉公人制が

100万人を超える規模でまかり通ったのはなぜか。1791年に小冊子『西インド産の砂糖・ラム酒を断つというたしなみに関するイギリス人への呼びかけも』も奏功して砂糖不買運動を通して奴隷貿易廃止を市民レベルで推し進めたイギリスで、スリランカにおける紅茶プランテーションでの「偽装された奴隷制」がなぜ問題にされなかったのであろうか。王室だけでなく、市民レベルにおいても紅茶がイギリスを象徴する「文化」になったから、黙認されたのであろうか。

現在の「エステートタミル」問題は植民地時代のこの大規模な移住・労働が尾を引いているに違いないとも想像される。現在の「エステートタミル」問題についてみておきたい。

#### 2-(4)「エステートタミル」問題

パルシックが用意してくださった「旅のしおり」の「ヌワラエリヤ」欄には次のように紹介されている。

「イギリス人が開いたプランテーション農園には労働者として南インドからタミル人が連れて来られた。通常、農場労働者が住む住居は農園内にある長屋である。1棟が4～6戸ほどに区分けされ、1区画は4畳半ほどの部屋が2つだけで、そこへ家族5～6人、多いところでは8人以上が暮らしている。ほとんどが雑魚寝で、トイレや水道は共同である。電気が来ているところは少ない。

現在、紅茶農園に住んでいる労働者は、植民地時代に南インドから連れて来られたタミル人の子孫である。先祖代々、同じ区画に住み、今でも植民地時代と変わらない生活をしている。茶摘みをするのは伝統的に女性労働者で、頭から紅茶を入れる籠をかけて、茶葉を摘みながら手際よく背中の中に入れていく。平均して1日当たり14キロほどの茶葉を手で摘んでいくが、かなりの重労働である。男性は主に農園内の雑草刈りや、耕運機の操縦、雑用などを行っている」。

表-1 民族別人口の推移でエステートタミルの位置を見てみると、総人口に占める割合は1953年の12.0%から直近の2012年には4.1%にまで低下している。この60年の間にエステートタミルは86.2%に人口が減少しているにもかかわらず、総人口がこの間に251.4%増大していることで、エステートタミルの比率が大きく落ちていくと解される。比率が落ちているものの、未だ84万人の存在を示している。しかし、いくつかの点で問題が放置され続けている。「しおり」での紹介にあるよう、140年もたつて住環境に好転がないところは驚きというほかない。

表-1 各センサス年における民族別人口の推移（千人、％）

	1953	同割合	1963	1971	1981	2001	2012	同割合
人口総数	8,098	100.0%	10,582	12,690	14,847	16,930	20,359.4	100.0%
シンハラ	5,617	69.4%	7,513	9,131	10,980	13,876	15,250.1	74.9%
スリランカ・タミル	885	10.9%	1,165	1,424	1,887	732	2,269.3	11.1%
インド・タミル	974	12.0%	1,123	1,175	819	855	839.5	4.1%
スリランカ・ムーア	464	5.7%	627	828	1,047	1,339	1,892.6	9.3%
オランダ系とその混血	46	0.6%	46	45	39	35	38.3	0.2%
マレー	25	0.3%	33	43	47	55	44.1	0.2%
その他	87	1.1%	75	44	28	38	25.5	0.1%

Source: Department of Census and Statistics, Sri Lanka

劣悪な居住環境が改善されなかった要因の一つとして、エステートタミル人が孤立化を余儀なくされてきたことをあげておかなければならないであろう。そもそもアクセス手段のない高地に連れてこられたのであるから、農園を離れて暮らすという選択はそもそも生まれなかったであろうし、時間が経過してもタミル語とシンハラ語の壁、宗教の壁、文化の壁が農園の壁と

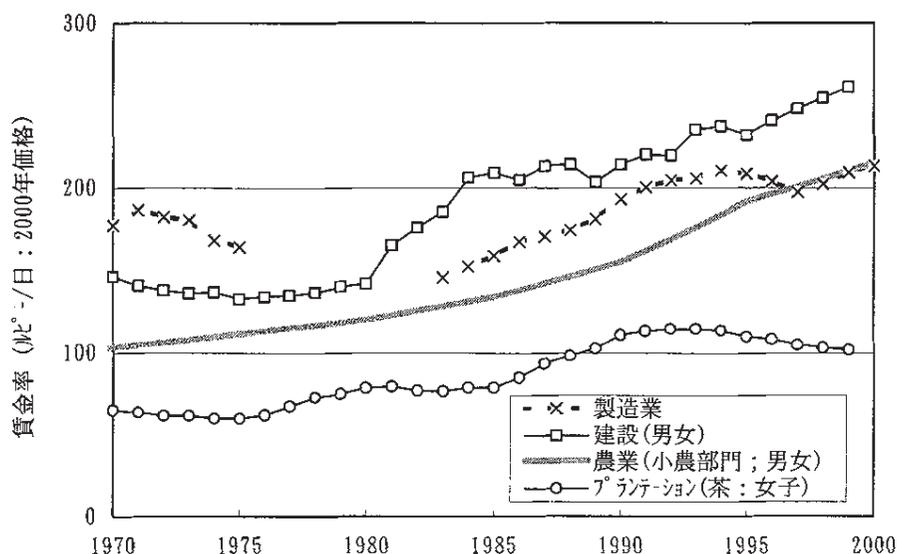


図-2 実質貸金率の推移 (GDP デフレーターでデフレート)

出所：農業を除き原資料は ILO、LABORSTA より農業貸金率は米生産費調査より推計された5ヵ年平均値を直線補間したもの、その他は3ヵ年移動平均  
 なお、引用は国際農林業協力協会 [2004] 26 頁から

して機能していたし、今日でも、弱まっているとはいえ壁がなくなっているとは言い切れないであろう。

低賃金労働については最近でも他の部門と比較して際立っている。

図-2は国際農林業協力協会[2004]から転載したもので、1970年から2000年までの部門別賃金の推移を示したものである。図-2から読み取れることとして国際農林業協力協会[2004]は次のように指摘している。

「この部門（茶のエステートの労働者）の実質賃金の動きは、小農部門の賃金率や建設業の賃金率の動きとは異なった動きを示している。1970年代半ばから1990年頃までエステート部門の賃金率も上昇傾向を示すが、1990年代に入って上昇傾向が加速される小農部門の賃金率に対して、エステート部門のそれは逆に低下傾向を示す。この事実は、小農部門の労働市場とエステート部門の労働市場が連結されておらず、切り離されていることを強く示唆している。両部門における賃金率の格差は大きく、2000年でエステートの賃金率は100ルピー/日であるのに対して、小農部門の賃金率は200ルピー/日。賃金率の格差に応じて労働力が移動可能であれば、このような賃金格差が恒存するはずがない」（119頁）。同じ農業分野でありながら、賃金が倍も異なっているのは、指摘のように両部門の労働市場が切り離されているからであり、問題はなぜ切り離されているのか、その理由である。この点に言及するまえに、2000年以降のエステート部門の賃金の動向をおさえておきたい。

表-2から、まず2006年7月のエステートの月収の中央値が平均値の54.3%であることが物語っているのは、エステート内の格差があまりにも大きく、その格差の原因も低月収家計の多さに規定されているということである。エステートの半分の家計がエステート内月収平均の半

表-2 セクター別家計月収；平均値と中央値（スリランカルピー、%）

	2006年7月			2016年			2016年/2006年	
	平均値 A	中央値 B	B/A	平均値 A	中央値 B	B/A	平均値 A	中央値 B
スリランカ	26,286	16,735	63.7%	62,237	43,511	69.9%	236.8%	260.0%
都市	41,928	23,642	56.4%	88,692	57,833	65.2%	211.5%	244.6%
農村 C	24,039	16,379	68.1%	58,137	42,133	72.5%	241.8%	257.2%
エステート D	19,292	10,480	54.3%	34,804	29,134	83.7%	180.4%	278.0%
D/C	80.3%	64.0%		59.9%	69.1%			

2006年の数値は Household Income and Expenditure Survey 2009/10, Ministry of Finance and Planning, Sri Lanka ただし引用は栗原 [2015] から

2016年の数値は Household Income and Expenditure Survey - 2016 Final Report

Department of Census and Statistics Ministry of National Policies and Economic Affairs Sri Lanka より作成

分程度で暮らさなければならないことを意味しており、貧困がエステート内で蔓延していたと考えられる。2016年には中央値が2.8倍にも増えて、この点は改善に向かっているともいえるかもしれない。しかし、2016年平均値で見ると、エステートのそれはスリランカ平均の55.9%でしかない。しかもこの表で取り上げているのは家計収入であり、「しおり」にあったように、女性は茶摘み、男性は園内肉体力労働についていて、夫婦の場合二人の収入が計上されていて、家計月収平均が2016年で34,804スリランカルピーである。しかもこの10年間の伸びもスリランカ全体で2.37倍増大しているところ、エステートだけが2倍に達していない。

エステートタミルは「しおり」にあったように、現在でも園内の長屋に、「先祖代々、同じ区画に住み」、こうした住居を含め「社会福祉サービスも各プランテーション会社によって提供されていた」（栗原 [2015]、8頁）。

栗原 [2015]によれば、こうしたことは「1992年にプランテーション農園が分割民営化される以前の国営公社時代においても同様であり、遡ればイギリス植民地時代においても」（同）そうであったという<sup>xiii</sup>。

「しかし、イギリス時代からの代々の農園経営者による農園労働者の生活環境の整備は必要最低限であり、水や電気など基礎インフラの整備も極めて低い状況である。安全な水へのアクセスは、プランテーション農園の多いヌワラエリヤ県で51.4%、同じくラトナプラ県で61.9%であり、これは全国平均の84.8%を大きく下回る。電気の普及率も76.9%と全国平均の85.3%に届かず、トイレの普及率も74%にとどまっており、全国平均の89.5%には程遠い」（栗原 [2015]、8頁）というありさまである。

表-3 スリランカにおける上位輸出品目シェアの変遷（1970-2010年%）

1970年		1980年		1990年		2000年		2010年	
紅茶等	58.5	紅茶等	38.3	衣類	33.8	衣類	52.1	衣類	42.0
天然ゴム	21.9	石油および石油製品	15.4	紅茶等	28	紅茶等	14.2	紅茶等	18.9
植物性油脂	5.8	天然ゴム	14.9	その他の非金属鉱物製品	9.3	織物用繊維の糸、織物および繊維製品	5.4	その他の非金属鉱物製品	6.0
果実および野菜	5.0	衣類	10.4	天然ゴム	4.0	その他の非金属鉱物製品	4.1	ゴム製品	5.2
織物用繊維	2.4	果実および野菜	5.0	特殊取扱品（種類別に分類されないもの）	3.9	機械類（電気機器を除く）	3.0	その他の雑製品	3.0
その他	6.4	その他	15.5	その他	21.0	その他	21.3	その他	25

出典：UN Comtrae、ただし引用は鈴木 [2016] 8頁から

こうした劣悪な住居・労働環境が、独立後も継続してしまっただ理由はどこにあるのであろうか。独立後の政府の取った開発政策にその理由があると考えられる。まずは1948年の独立直後は、植民地時代の「プランテーション経済」を脱することはできず、その構造は残らざるをえないと考えられる。またスリランカも多くの途上国が採用した輸入代替型工業化政策を展開した。「1960年代から1970年代は、途中UNP政権への揺り戻しがあったものの、主としてSLFPのバンダーラナイケ政権による輸入代替型工業化や保護主義的な政策が実施された時期であった」（鈴木 [2016]、6頁）<sup>xiv</sup>。輸入製品を自前で生産するための資本財・中間財の調達資金は従来からの紅茶、天然ゴム、ココナッツの輸出で賄わざるをえず、例えば紅茶で考えると、紅茶の輸出競争力を維持するためには、従来のエステータタミル人の低賃金をエステートと一体となって利用する方針を各政権が続けて採用したと考えられる。

表-3は1970年以降、10年毎の輸出品目シェアの推移である。1990年前後で輸入代替型工業化から輸出主導型工業化に方針転換されたことが見て取れるが、シェアが落ちたとはいえ、2010年においても紅茶は輸出の20%弱を占め、未だに外貨獲得の有力な換金作物になっている。Tropical commodity CoalitionのTea Barometer 2010に基づいて栗原 [2015]が割り出したスリランカ紅茶の生産高に占める輸出比率は95%を占めている（3頁）。同様に割り出したインド紅茶の輸出比率が20%であることと比較すると、スリランカの紅茶が独立した後にもいかにプランテーション農業を引きずってきたか、独立後の政策的歪みが顕著に見て取れるであろう。また同様に栗原 [2015]が割り出したオークション販売の割合もインドの55%に比べ、スリランカは93%と断然高い。1990年5月の世銀の構造調整融資の後、オークション競売はコロombo市場だけでなく、ロンドン市場で「ブローカーを通さずに、直接、海外業者に販売する」（辛島朝彦 [1994]、203頁）ルートもできあがった。こうして独立後も植民地時代の紅茶プランテーションの残存は低賃金の温床となって、スリランカ政府にとって外貨獲得のための手立てとして、また紅茶を扱うグローバル企業にとっても利潤獲得の手立てとして維持することが有利にはたらし、独立70年経っても残り続けていると考えられるのである。

## 引用文献

『エリザが読んだ セイロンの歴史』 <http://www.ne.jp/asahi/khasyareport/khasya/history-lanka/01-history-of-sri-lanka.html>

SGCIME [2017]、SGCIME『第3版現代経済の解説—グローバル資本主義と日本経済』、御茶の水書房

辛島朝彦 [1994]、「途上国の経済構造調整の実態—スリランカの事例に基づいて—」、海外経済協力基金開発援助研究所 『開発援助研究 1994 Vol.1 No.2』

栗原俊輔 [2015]、「バリューチェーンと労働者をめぐる一考察 —スリランカ紅茶プランテーション農園労働者の付加価値と貧困—」、『宇都宮大学国際学部研究論集 第 40 号』  
[https://uuair.lib.utsunomiya-u.ac.jp/dspace/bitstream/10241/10012/1/13420364-40-1\\_12.pdf](https://uuair.lib.utsunomiya-u.ac.jp/dspace/bitstream/10241/10012/1/13420364-40-1_12.pdf)  
国際農林業協力協会 [2004]、『スリランカの農林業—現状と開発の課題—2004 年版』  
臼井隆一郎 [1992]、『コーヒーが廻り世界史が廻る—近代市民社会の黒い血液』、中公新書 1095  
杉本良男・高桑史子・鈴木晋介 [2013]、『スリランカを知るための 58 章』、明石書店  
鈴木一成 [2015]、「スリランカ経済の軌跡と発展への課題 — 求められる輸出産業の高度化—」、  
『アジア研ワールド・トレンド No.243』  
清田和之 [2010]、『コーヒーを通して見たフェアトレード—スリランカ山岳地帯を行く—』、書肆侃侃房  
布留川正博 [2019]、『奴隷船の世界史』、岩波新書 1789  
David Eltis & David Richardson [2010] , Atlas of the Transatlantic Slave Trade , Yale University. 増  
井志津代訳『環大西洋奴隷貿易歴史地図』、東洋書林、2012 年  
RSVP No.14 『紅茶の楽園、スリランカへ』、(株)R.S.V.P 発行、2014 年

<sup>i</sup> LTTE: Liberation Tigers of Tamil Eelam、タミール・イーラム解放の虎

<sup>ii</sup> 中村尚司龍谷大学名誉教授から今回のスリランカ調査の事前研究会で提供いただいた資料である。氏は、NPO パルシックの西森光子氏とともに、スリランカ調査でも同行いただき、この期間多くの情報をその都度寄せていただいた。改めて両氏に感謝の意を表しておきたい。

<sup>iii</sup> ポルトガルとオランダとの攻防については『エリザが読んだ セイロンの歴史』 <http://www.ne.jp/asahi/khasyaireport/khasya/history-lanka/01-history-of-sri-lanka.html> で詳しく記されているので、その要約を以下示しておきたい。

すでにオランダによる横取りは 1602 年から始まっていた。その年にオランダはスピルバーゲン提督の三隻の船がスリランカに寄港し、キャンディ国王に謁見し、「国内にオランダの砦を築くことも許された。・・・こうしてオランダはスリランカのシナモンと胡椒を手に入れたのである」。おそらくキャンディ王国はポルトガルをオランダによって排除してもらう腹づもりでいたのであろう。そして、「1639 年、オランダのウェステルウォルド Westerwold 海軍大將がパティッカロアに軍を率いて上陸し、2 ヲ所に砲台を築いた。ポルトガル軍へ水を供給する井戸の水路を遮断したので、短い抵抗があったもののポルトガル軍はすぐに白旗を掲げ、ネガパタム Negapatam へ退散した」。

「オランダは次にトリンコマリを襲撃した。警備が手薄だったことやポルトガル軍の弾薬が不足していたことがあって、わずか数日で城砦はオランダ軍の手に落ちた（。）・・・翌年、12 隻のオランダ船がコロombo 港に現れた。船団はネゴンボへ向かい、その地に 2000 人のオランダ兵が上陸し、たちまちのうちに城砦を築いた」。

「オランダ軍は更にガーッラへと向かい、ポルトガルの砦を攻めた。18 日間の攻防の末、砦の一隅に突破口を開くと、わずか 2 時間でガーッラの砦を落とした」。

だが、ポルトガル領ゴアの総督がランカー島にやってくると、戦況は一変した。若くて行動的なマスカレンハス Mascarenhas 総督はネゴンボを砲撃し、短時間の戦闘でオランダを降伏させた」。

しかし「1644 年、オランダはポルトガルからネゴンボの城砦を取り戻し、守りを固めるために周囲に四つの要塞を築きそれぞれに大砲を備えた。1646 年、ポルトガルとオランダの間に休戦協定が結ばれ、その協定がもたらす安定は 1654 年まで続いた」。

1658 年、両国は再びコロombo で交戦を始めた。コロombo の要塞は 800 人の守備隊で守られていたが、海路がオランダによって封鎖され、ポルトガルは食料の調達ができなくなった。食料の欠乏が始まり餓死者

を出し、ポルトガルは防衛に窮した。5月10日、財産の保障とジャフナへの逃避を条件にしてコロomboのポルトガル人は140年にわたって領有した城砦をオランダに明け渡した。

ジャフナへ逃れたポルトガル人に安全な避難場所はなかった。1658年6月21日、オランダ軍はポルトガル人の財産を略奪し、ジャフナの要塞に攻撃をしかけ守備兵を捕虜とした。ポルトガルのスリランカ統治はここで終焉する。

なお、『エリザが読んだ セイロンの歴史』については訳者が次のように説明している。

同書は訳者が1978年頃に神保町の北澤書店で購入された *History of Ceylon* で、その訳者の序で、「1893年6月、スリランカのヌワラエリヤでエリザベス・ホワイトは冊子を手にした。英国キリスト教伝道協会がコロomboで発行した‘History of Ceylon’ (セイロンの歴史) だ。115ページのコンパクトなハンドブック。そこにスリランカの歴史が丁寧にまとめられている。ナイトン、プライダム、ターナー、テンネント、ファークソンという、当時のスリランカ研究第一人者たちの著作から歴史に関わる部分を集めている」、と

<sup>iv</sup> この点についても『エリザが読んだ セイロンの歴史』は次のように記している。

「オランダ人は民生の向上にほとんど興味を示さなかった。彼らの最大の関心は自分の利益だった。

スリランカを植民地としてから最初の数年はシナモンの輸出に没頭し、シナモン樹の栽培に全力を注いだ。たとえ地主でもその所有地に芽を出したシナモンを自由にすることはできなかった。すべてのシナモンは公有財産であり、シナモン園の監督者には絶大な権限が与えられた。

チャリア(シナモン剥き)が剥いたシナモンの皮はオランダの貯蔵所へ運ばれたが、チャリアに対してオランダ人は何の報酬も支払わなかった。

オランダの植民地経営はシンハラ人を窮乏させた。窮乏は奴隷を増やした。そして、奴隷は酷使された」と。

この行間を解読すると、オランダの統治下でシンハラ人は無償で働かされ、その結果窮乏化したシンハラ人は「債務奴隷」となり、さらに酷使されることになったと。このような統治はシナモン園だけでなく、コーヒー・プランテーションでもみられたと考えられよう。

<sup>v</sup> この点に関して、『エリザが読んだ セイロンの歴史』でも次のように記されている。

「コーヒーはアラブ商人がスリランカにもたらした産物だと考えられている。ポルトガルがこの島にやってきたとき、コーヒーは既にこの島にあった。

オランダはコーヒーの収益を拡大するためにカンディ王国での栽培を試みた。英国はカンディ王国を征服したときに、ハングランケタの‘王の庭園’と呼ばれる広大な土地にコーヒーが栽培されているのを見つけている」(<http://www.ne.jp/asahi/khasyareport/khasya/history-lanka/23-britain-as-colonial-ruler.html>)、と。

<sup>vi</sup> ただし現ブラジル領はポルトガルの支配地域として既成事実化が認められ、ラテンアメリカ地域で唯一ポルトガル語圏となる。

<sup>vii</sup> 「王立アフリカ会社は、1672年にロンドンに設立された奴隷貿易のための国策会社で、すでに西アフリカの黄金海岸そのほかの拠点を立てていた。英領西インドや北米植民地に奴隷を供給してきたのである」(布留川 [2019]、49頁)。

<sup>viii</sup> 『エリザの読んだ セイロンの歴史』にもコーヒー収穫量の記載がある。イギリスによって「初めてコーヒー栽培が行われたのは1820年、ジョージ・バードがカンディでコーヒー・プランテーションを作った。栽培面積が増えてコーヒーはセイロンからの最も重要な輸出品品になった。1827年に輸出量1万6千cwts/80トンだったものが1847年には30万cwts/1万5千トン、1870年には100万cwts/5万トンを超えている。All ABOUT COFFEE と『エリザの読んだセイロンの歴史』で記されている輸出量では1870年以外の数値が全くかけ離れているにもかかわらず、もっとも疑念が残る1870年で奇妙なことに大きな差がない。この点はさておき、All ABOUT COFFEE では1741年に17万kgの輸出量があった記載されていることから、すでにオランダ統治下でコーヒー栽培がなされていたことがうかがえよう。

<sup>ix</sup> キャンディの彼の墓標には「この島での紅茶とシンコーナ(キナノキ)事業のパイオニア」と刻まれている。キナノキ(cinchona)とは南米産で、樹皮からマラリアへの特效薬の成分が採取できる。『エリザの読んだ セイロンの歴史』の最後の脚注では次のように記されている。1883年の「後、数年に亘ってコーヒー・エステートは薬の病気のために収穫量が減少する。コーヒー生産者は病害の駆除法を見つけて出す作業に追われ、また、新たなプランテーション作物の開発に取り組みなければならなくなった。・・・期待されている新作物には次のようなものがあった。シンコーナ Cinchona (キナノキ)。南米原産の木で、その幹から熱病の特效薬であるキニーネ Quinine がとれる。1860年に英国植民地政府は南米からシンコーナを取り寄せ、ヌワラエリヤ近郊のハクガラ Hakgala の植物園に植えた。若木は成長し増え、現在、島内には数百万のシンコーナが育ち、その輸出量はシナモンを越えた」。

おそらくキナノキの需要は現地、マラリアへの特效薬として形成されたと考えられる。スリランカの

中央山地はプランテーションが形成されるまで未開の地であったのもマラリアを恐れていたことと考えられる。それが現地需要を超えて輸出用換金作物にまでなったのであろう。プランテーションたる所以である。

なお、RSVP No.14『紅茶の楽園、スリランカへ』ではジェームス・テイラーのことを「セイロンティの父」とか「紅茶と結婚した男」とも紹介されているが、叙上のように情熱を燃やしたのにはシンコーナもいて、両者とも金儲けの手段として考えていたのであり、とどのつまり彼はスターリングポンドと結婚したアントレプレナーだったと考えられよう。

<sup>x</sup> 『エリザの読んだ セイロンの歴史』の最後の脚注には以下のように記されている。「エリザがこの冊子を読んだ 1893 年にはコーヒーから紅茶へのプランテーション作物の転換が済み紅茶生産は最盛期を迎えていた。この時だったのだ、リプトン卿がオーストラリアへのバカンスの途中にコロンボに立ち寄ったのは！

リプトン卿はビジネスに長けている。どこへ行っても商売だ。このとき、彼はセイロン紅茶に新しいビジネスの大きなヒントを得た。

英国の中産階級の労働者に安価な紅茶を届ける。1890 年、コロンボ港の正面に建つグランド・オリエンタル・ホテルでいすに腰掛けビジネス・パートナーと商談をしたとき、フレッシュな BOP 茶葉をティ・バッグで英国の消費者に届けることを思いついてしまった。オーストラリア行きはすぐに中止して、セイロンの紅茶プランテーションを 5 ヶ所、即座に買い取った。大きな資本が注入されたヌワラエリヤの開発は勢いを加速させて進んだ」(<http://www.ne.jp/asahi/khasya/report/khasya/history-lanka/23-britain-as-colonial-ruler.html>)、と。

我々もこのホテルに調査の最後に宿泊した。我々は商談はしなかったが、眼下のコロンボドックヤードが円借款で建設されたものであることを中村名誉教授から冗談交じりに教えていただいた。

<sup>xi</sup> ただしこの箇所の記述の参照先としてとして、B.L.C.ジョンソン著、山中・松本・佐藤・押川訳『南アジアの国土と経済：第 4 巻スリランカ』（1987 年、二宮書店）があげられている。

<sup>xii</sup> 布留川 [2019] では次のように紹介されている。

「1869-70 年にカルカッタからガイアナに到着した船は 15 隻で、約 6700 人を運んでいる。この頃ガイアナに到着した約 5 万 3000 人を調べてみると、そのほとんどはインド出身者、うち 7 割以上が男性で、4 分の 3 以上が年季労働者であった」布留川 [2019]、215 頁、。

<sup>xiii</sup> スリランカでは 1985 年に外貨準備が急減し、世界銀行に構造調整融資、IMF に構造調整ファシリティ供与を要請し、1990 年 5 月世銀は構造調整融資を決定した。その条件としてスリランカ政府はプランテーション部門の民営化を受入れ、1992 年に実施した。その内容は以下のようである。

「二大国有企業が管理していた 507 農園のうち、スリランカ政府は・・・優良農園の 452 農園について、新たに 22 の民営企業 (Regional Plantation Corporation, 以下 RPC) を設立した。そして、農園の土地や建物などの資産の所有権は、二大国有企業に残され、RPC にはリース権のみが委譲された。また、入札により、RPC の経営権がスリランカ国内の民間企業に委託された」(辛島 [1994]、202 頁)。

<sup>xiv</sup> UNP：統一国民党 (United National Party)、SLFP：スリランカ自由党 (Sri Lanka Freedom Party)